

Title	対談『清朝考証学の研究』（下）
Author(s)	加地, 伸行; 近藤, 光男
Citation	中国研究集刊. 1989, 8, p. 34-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61146">https://doi.org/10.18910/61146</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 対談 『清朝考証学の研究』 下

著者 近藤光男  
読者 加地伸行

## 〔承前〕

加地 ここ、重要なところですね。御著書「およそ戴震の学問には、はじめに何か原則を樹ておいてあとは個々の事象に対して演繹的にその説で通すような性格が感ぜられる」（三一九頁倒数四行）と。

近藤 ここまではもう、内藤湖南以下、倉石（武四郎）先生・吉川（幸次郎）先生、皆おっしゃっていることです。

加地 で、ここからあとですね、結論がやっぱり先に何かあって、結論の化粧に論証がその前に出てるといふことありませんか。

近藤 それが言いたいです。

加地 そうでしよう！

近藤 そういうふうに読んでいただければ。

加地 ほんで、安心しました。いい読者でしょ（笑）。ふつう清朝考証学いきましたら、帰納的に述べていって結論に到達したというような理解をしますね。今の自然科学の連中が、実

験していったらこうとするのと同じようにですね。ところがそうではなくって、むしろ論証はお化粧のプロセスのようなところだと。これ、清朝考証学の位置づけが随分大きく、変わりますよ。

近藤 ええ、従来のイメージの転換。

加地 変わる。これ、もうちょっと詳しく説明された方がいいと思いますよ。

近藤 ああそうですかねえ。いやそれも、事実でこうやって押しつけとけばね、先生のようにその、すぐれた読者には、私が下手な言い方するよりも、それ以上にわかっていただけと。

加地 いえいえ、私わかりませんよ（笑）。私はミーハーですよ（笑）。

近藤 そうおっしゃらないで。

加地 先生、著者はもう少し親切にお書きにならないと。そこら辺はねえ、勇み足でもいいと思うんですよ。やっぱり、はっきりともう少し、あの、実証もへチマもなしにお書きになられた

らいかがでしようか。これ、戴震の学問を通じて、清朝考証学の本質の所へ入っていく。見事だと思っんですねえ。ですから帰納とか演繹とか言ったって、そんな単純なものじゃないんだということ、このところ、いつか一べんまた、『続清朝考証学の研究』という風に。

近藤 いやあ、むつかしいでしょうなあ。

加地 あるいは清朝考証学の全体的な……全体像の学問ということの議論の中でですね、こういうところを、もう少し自由にお書きになられたらおもしろいんじゃないかと思っんです。そうなら段階で、もうそれは文学の研究じゃなくって思想史の研究となると思っんです。さていよいよ「戴震の経学」という大論文です。

近藤 ははあ。

加地 これ、いい論文ですねえ、大変失礼な申しあげかたですけども。

近藤 とんでもございません。

加地 戴震について非常によくわかりました。それで、その三二九頁「以明例」のですね、この戴震の王鳴声あての書簡文の訳ですが：「例」を法則という風に訳していらっしやるんですけども。

近藤 ああ、いやこれがねえ、大変だったですよ。結局は吉川先生のお教えに従ったんですよ。ここは多分、『日本中国学会報』（二七号）に出ていたものと較べていただくと違っると

思っますね。

加地 あ、そうですね。

近藤 ええ、つまりこれね、「以て例を明らかにせん」なのか、それともその、何だっけな、この手紙の読み方全体、懸命に考え、山井（湧）さんの意見も、お知恵も借りてるんですが……

加地 もう一つの方はどうなんですか。

近藤 えーっとな。恐らく「明らかな例」を挙げることにしようぐらいにしてたんと違っかな。

加地 研究の「例」を。

近藤 んー。

加地 「例」と「法則」とは全然違っますよ、先生。

近藤 ええ、ですからねえ、ものすこい違いです。

加地 違っます。で、先生、これを法則とされたわけですね。

近藤 これねえ、特に吉川先生の御意見だったと思っますけども、私自身やっぱり今、自身ですつと全部見ますとね、こら絶対、法則やとね。

加地 はあ、こらすこいことですね。

近藤 いやー、加地先生、さすがに真つ先にここチェックされたのはすこいですよ。ここが要（かぎ）ですよ。

加地 はあ。

近藤 吉川先生も真つ先にここおっしやりました。

加地 あーそうですね。はあ。これ、法則と例とは全然意味違っますからねえ。戴震の評価をされる時に、何ていうんでしょ

うか、先生のお仕事でこれが取りあげられることになるんでしょ  
うね、と思いますですね。

近藤 はい、こういう学者の文章の翻訳ということ考えちゃい  
ますよね。だから言葉で訳してもしようがないということです。  
中身が問題です。

加地 中身、そうですね。この「例」という漢字だけ見たって  
出ない、この訳は。やっぱり戴震の全体を見てみてこの訳が出  
てくるということですね。それじゃ、この訳は非常に重い。

近藤 ちょっと先走るかもしれませんけど、この手紙全体がで  
すねえ、戴震はまさに、研究の原則を、あるいはその、研究の  
精神をねえ、原則を超えた研究の実態を、王鳴盛に説いてると。  
ところが王鳴盛は最後まで受け入れないからわからない。で、  
専ら訓詁の次元で。

加地 「例」の次元で述べてると。

近藤 そうそう。まさにそう。

加地 「例」の次元でなくって、法則の次元だということと言  
いたかったんでしょね。しかしこれこそ、注釈が要りますよ。  
このごろの若い人は、「例」、あ、近藤光男が法則と訳したか  
ら法則でいこうと。

近藤 ああ、それは困ります。

加地 で、……三三九頁九行目ですが、ここも重要な訳をして  
らっしゃいますねえ、「陸徳明釈文音切無し」のところ。

近藤 「音義を示しません」。

加地 いえ「音切無し」でしょう。

近藤 あ、原文はね。

加地 ええ。そして「音義を示しません」と訳されたんですね。  
つまり反切を示して、それで意味はこういう意味だとしている  
んだと、陸徳明は。だから、音義ということでしょう。

近藤 はあ、はい。

加地 これはもちろん我々わかるんです。だけどこれ、音か義  
かという問題の議論のところでもあるんでしょう。

近藤 はあ。

加地 だから、これは先生、誤解を与えていると思います。……後  
世の学生には。

近藤 僕にすればね、翻訳とは、かくあるべきものだ。

加地 ああ、そうか。こういう意味でのとらえ方があるから音  
義と訳さないかと。

近藤 はい。

加地 はあ。いや、それはね、私のような読者にはわかるんで  
すよ(笑)。しかし読者にはミーンハーがいますからね(笑)。で  
ね。三三二頁の訳あるでしょう。漢文が二行あって、「漢唐の  
学者たちは云々」と。で、「光は充なり」という訓詁です。こ  
の訓詁はやっぱ難しい訓詁だと思われませんか。「光は充なり」  
というのは。

近藤 んーっと、決して珍しい訓詁じゃあないと。つまり注を  
要しないものと考えた、とみたんです。

加地 そうですよ。私、「光は充なり」、すぐわかりました。なぜか。近藤「光」男ですよ。

近藤 えーっ。

加地 「光は充なり」ですよ。

近藤 からかわないで下さいよ（笑）。

加地 光は光とも読むじゃないですか。

近藤 あ、なるほどねえ。

加地 御自分の名前の「光は充なり」というのを訓話をたどつてですね。（笑）

近藤 言われるまでは気がつきませんでした。自分の名前忘れてました。老荘です。「名」を忘れてました。

加地 弁せんと欲して忘れておられたんですね（笑）。でもね、ミーハー読者は、ああ自分の名前だから一生懸命やってるんじゃないかて（笑）。この前後ものすごくおもしろかったですね。

近藤 ああそうですか。この論文をおもしろがっていただけるとのは、余程の学力の方ですねえ。

加地 いえいえ。そして、やがて大逆転があるでしょう。これスリラー。先生、これ憎いなあ。最後にどんでん返しがあるでしょう。始め伏せておいて。まるで推理小説ですよ。

近藤 はい。

加地 さっきの『考工記図』のおもしろいですけども、この「戴震の経学」の最後はいいですねえ、はあ。先生、テレビでどんでん返しのサスペンスドラマ見過ぎじゃないですか。

近藤 （笑） どうも、定年後の生活を見透かされたような感じが（笑）。

加地 どんでん返し。どうもそんな気がするんですねえ、これは先生の書齋に入らんとわからんわけですよ（笑）。読者にね、どんでん返しをなんていう、これサービスピス精神ですねえ。

近藤 （笑）

加地 おもしろい。最後に先生、推理を立てられてね、この王鳴盛の手紙が偽りかどうか。これはおもしろいですねえ。どうでしょう、これは偽りかどうか、どちらに与されますか？御自身がお書きですけど（四七〇頁に「この両氏葛藤の実態についての私の一つの推理」）、戴震が王鳴盛に出した手紙に対して、王鳴盛はわしゃあそんな見とらんと言ってますねえ。

近藤 見とらんと言ってますねえ。

加地 戴震は書いてるでしょう。「かもわからん」てなことお書きで、何か最後は、どっちいってしまうかわからんような（笑）。

近藤 やっぱりその、私はもらったと思うんですねえ。

加地 やっぱり、王鳴盛が嘘をついておると。

近藤 はい、もらっていると。その点では嘘ついてるんじゃないかと。

加地 その時、王鳴盛と戴震との関係はどうでした？

近藤 ええっと、それは王鳴盛の方が高いんじゃないですか。ああ、翰林院編修と一介の布衣でした。

加地 王鳴声は戴震に対して、この田舎者とかいうような。

近藤 ええ、それは当然ですよ。

加地 やつぱり、そういう感じですか。

近藤 と思いますねえ。安徽の山奥からのこのこ出てきた。しかも、本当にもう、乞食みたいな格好で都へ出て来たという記述でございますからねえ。銭大昕がそう書いてます。

加地 ああそうですか。

近藤 王鳴盛って人は、これ最初は倉石先生からきいたんですが、後で知ったら、『嘯亭雜錄』に出てるんですけどねえ、王

鳴盛は金持ちの門に入る時にはいつも、こう何か物を抱えこむような格好して門をくぐったと。で、誰かがなぜかって聞いた

ら、いや、金持ちの福にあずかって自分も金持ちになれるようにと言ったと、確かそんな話知られてるんです。

加地 どちらかというやや政治的な、そういうセンスあったわけですねえ。

近藤 あると思いますよ。いかにも中国人的な……いや、そう

言っちゃまたこれ叱られるな。汚ないといったら少しおかし

けれども、清貧な学者からなら、饜蹙を買うような性格が、王

鳴盛にあったという、ちよっとした証拠あるわけです。

加地 わかりました。次に段玉裁に入りたいと思うんですが、

戴震の場合は、例の『尚書』の堯典の問題を取り上げてひとつ

のところを、集中的に論じなさいている。これは、つまり代表

的な問題ということでここから戴震の全体像を見るということ

ですね。ですからよけい、一点集中というんですか、そのこと

によって浮き上がらせていこうという、こういう方法自身がお

もしろいですね。

近藤 ありがとうございます。これは清朝考証学の方法に過ぎ

ないので、私はそれをまねしているに過ぎないんですが。

加地 ふつう段玉裁のあちこちのところをつまみ食いして書く

とか、戴震のをつまみ食いして書くとかでしよう。そういう意

味で、これはこの方法自身が先生の清朝考証学流の仕方をなさ

ているとすれば、一点集中主義と言いますか、それだけに精密

ですので、清朝考証学全体の問題をとりあげなくとも、このこ

とだけで非常におもしろいですね。で、「段玉裁の学問」の三

六一頁七行目、これはおもしろかったですね。つまり、学問が

わかる人、書を読める人に対して、読むことすなわち暗誦と心

得ているひと、これはまさに、俗にいう「論語読みの論語知ら

ず」でしようね。これは、永遠の問題ですよ。これからも起こっ

て来ると思いますね。ですから、これはことばを読むことに関

する本質的な問題をとらえていたということですね。

近藤 まさに「読書の学」なんですね。

加地 これはやはりすごいですね。それから三六二頁ですけれ

ども、この線でいきますと、ふつう音読する場合には、『論語』

の「論」は三〇と読みますが、段玉裁流に読みますと、二〇と

いうことになりますか。

近藤 皇侃の『論語義疏』の頭に、平か去か議論してますね、

どういふ資料でどういふ結論だったか忘れましたが、えらい丹念に書いてませんでしたか。

加地 はい、いくつかの意味を集めましてね、「論」の意味を。だからこの段玉裁流にいうと、これはもう論議というふうにならぬに二声に読む必要はないということですか。「論」の字に異なった訓解を与えているのは、孔子の当時、論の字になら異なった意味はなく、平声去声の別もなかったことに思い及ばないでいるのである。」と。

近藤 これは「六書音韻表」で確かめてみます。すみません。宿題にしてください。

(近藤注：「六書音韻表」巻一に「古四声説」があり「古に去声無し」といふ説がある。それがこの稿を書いたとき念頭に在って、なんの疑いもなく「平声・去声の別もなかったこと」と訳した。段氏は魏晋になって平声の多くが、仄声に転じたと考えているので、梁の皇侃があんな議論をするのだ、というのであろう。)

加地 私は中国人の使っている言語、とりわけ漢字が彼らの思考を決定している大きな要素だと思っっているんです。ですから、言語問題のところは踏みこんでくる時には、『説文』の「六書音韻表」を使って『説文解字』を意味づけをされている、これは非常に勉強になりました。ここところは、形だけでなく音がそれをというプラスをしてらっしゃる。

近藤 頼(惟勤)さんは、『説文』というものは音義の書であ

るといふ考え方をしておられて、僕のことくいちがうわけなんでしょうね。しかし、認めて下さったんです、この考え方を。私は段玉裁の考え方がどうかというところで議論してまずから。だから段玉裁は、『説文』は字形の書である。だから、我輩が字音の書を作って、つまり六書音韻表を作って『説文』にくつつけることによって『説文』が「経」になると。

加地 そうか、完全な形になって。

近藤 ちょうど戴震が『屈原賦』に注をつければそれが『詩経』に近づくように、そういう意識で段氏は『説文解字注』に「六書音韻表」を附刻した。

加地 『説文解字』そのものの解釈の問題になってきますね。結局、段玉裁の考えた『説文解字』が何であったかという。

近藤 例の「何に从ふ、何の声」、それは、音と見れば音でしょうが、それは字形を説明するために、字には当然音があるから、六書の説明のために附けるまでなのであって……。『説文』は字形の書だと。だから我輩がそこに字音の体系を示すことによってこれではじめて『説文』は全きものになると。

加地 そうすると、これは重大な問題になる。『説文』とは何かという問題になってくるわけですね。

近藤 これで、ここでも許慎を超えるわけですね、さっきの王鳴盛の立場と違って。鄭注を墨守するのが王鳴盛、そんなものにこだわってたらあきません、というのが戴震。

加地 逆に先生、それは不遜な考え方ですね。

近藤 それに關してはね。でも、その不遜あるが故に「経」が生きた。乾嘉の時期以降に「経」が生き延びた。つまり、今も「六書音韵表」なかりせば、段玉裁の注なかりせば、『説文』は死んでいたかもしれない。

加地 ある時期の単なる語源書に終わってしまった。

近藤 はい。しかしつまり、やっぱり現在に生かしている。

加地 では、三七一頁の最後、「なお戴震の引く古人の言葉、その原文は「友原有相師之義」である。古人とは誰をさすかを知らず、従ってこの句の読み方にも不安がある。」と。この「相師」、『論語』のこととは違いますか。

近藤 へーえ。

加地 『論語』に、目の見えない音楽師に、ここは階段ですよ、ここは座席ですよって孔子が教えますね。すると弟子の子張がそういう態度でいいのかって聞いたとき、「子曰く、然り。固より師を相く（あるいは「相くる」）の道なり」。この「相」を「導く」と読んでいるのは馬融です。鄭玄は「扶ける」です。だから、「友原より師を相く、或は、相くるの義あり」じゃないでしょうか。意味的にはもちろん、先生のおっしゃる互いに師とすることだと思えますけれども。師とすることというよりも互いにたすけあうということ。

近藤 に読みたいですよ。

加地 戴震はこの手紙では段玉裁に対して、友人なんだと、学問上においてお互いに助け合って勉強するんだと言っている意

味じゃないんでしょうか。

近藤 おもしろいですね。御説明だと、この「師」もやはり楽師の師に読むわけですね。

加地 そう思うんですが。上下でなくてお互いに助け合うもんだと。

近藤 孔子が楽師をたすけたようにたすけると。

加地 はい、私はそう読んだんですがね。

近藤 はい、わかりました。

加地 それでは次は王念孫ですが、「戴震の経学」とあって、その次「段玉裁の学問」「王念孫の学問」と、こういうふうにお書きですが、この王念孫の場合もまた同じく、ひとつのテーマをお決めになって、これもさきほどおっしゃった清朝考証学の方法ということで非常におもしろかったですね。

近藤 ありがとうございます。

加地 で、この中の、不思議なのは三七八頁なんですが、王念孫のような大考証学者がですね、『戦国策』について、なぜテキストのこと書いていないんですか。

近藤 えーと、ちょっと虚をつかれましたね。でも必ずしも「触れてない」ことはなく、三七八頁全体、とくにおわりから一、二行めに、ことわりがあります。私が著わしました『戦国策・上』（集英社・漢文大系23）巻首「解説」で詳考を加えました姚本でも、その雅両堂本にかかわるめんどうな説明と人間関係を述べることになるので、避けたものでした。



加地 わかりました。それから、これはすごかったですね。三八四頁の例の馬王堆から出てきたもの、こういう帛書がでてきてですね、王念孫の推理があたっていたというのは。それから、三八九頁の終わりから五行目、これもやっぱり段玉裁と同じということなんですか。王念孫も同じく筆者の心を読む、そういう意味では同じだと。

近藤 はい、王念孫の場合も出てきたという報告でございます。

加地 それが結局つながるのが、三九〇頁五行目ですか、「好學深思、心にその意を知る」と、皖派の行きつくところはここにあると。それから、教えていただいで私始めて知って非常におもしろかったのが、この四四五頁一行目です。阮元がこんなことしてるのは非常にもしろい。詁経精舎での試験にテキスト・ノートの参照を許していたということ。科挙用の勉強をさせなかったというところは。

近藤 はい、暗記じゃないと。

加地 それから、四五〇頁の終わりから六行目あたりから終わり二行目あたりまでの、音が近ければ大体同じ意味を持つ、と。これ、藤堂さんの単語家族の考え方に似てますね。こういうアイデアはやっぱり持ってたんでしょか。

近藤 はい、溯れば焦循なんですね。より詳しくは、『吉川幸次郎全集』巻二十と書きこんでますけれども、この「矢」の字について相当詳しく述べておられます。吉川先生は確か「描写の素材としての言語」という論文でいうか、やっぱり書かれた

ものがありました。それにこれはやっぱりもう、おっしゃるように、藤堂さんは大変得意だったですよ。僕にはじかにいろいろ談話で話されましたね、よく。

加地 単語家族という。

近藤 はいはい、それからだんだんとまとめていかれて。

加地 アイデアはこっからかなあと思ってます。

近藤 だと思えます。一番目といえるかどうかは分かりませんが、焦循だと思います。

加地 藤堂さん、どっかで書いておられますか。

近藤 どっかに書いてられると思いますね。

(近藤注：例えば藤堂氏の極めて初期の著『中国語語源漫筆』大学書林・語学文庫・52頁)

加地 これ見たら、藤堂さんの舞台裏が見えたというか。さてそれでは、読者として総括的な問題のところできくつかお話ししたいと思うんです。まず先生の御本を通じて感じましたのは、朱子学との連関ということがほとんど触れられていない。これはどうしてなんでしょか。

近藤 いやいや、勉強してないからなんです。

加地 いやいや、そういう教科書的な答えじゃ困るんで、(笑)もうちょっと理由をですね、つけていたただかんことには。あの、当時の科挙の試験は朱子学を学ばないとパスしませんね。清人は若いときまず朱子学を勉強して、それから考証学になるんですよ。それ先生どういふうに。

近藤 そういえば、戴震が幼ないときに、『大学』の「右経一章」について塾師を問ひ詰めたというのなんか、それですね。

加地 劉宝楠の『論語正義』なんか見えますとね、論証していつでももうまいこといかなないときがあるんですね、自分の説明が。そしたら、「旧説に曰く」言うて、それでちゃんとうまく説明つくんですよ。旧説って何かと思つたら朱子の説なんですよ。ひどいもんですわ、あれは。

近藤 それは、ひどいかどうか。つまり、朱子に対しては必ず敬意を表しておりましたね。一言、「朱子を除いては」ということわりが、私「漢学師承記」で覚えがありますね。なんか宋儒の悪口を言うとき、宋儒を批判するときに、朱子を除いては、こうと、これは覚えがあります。

加地 なるほど。清朝考証学といえども、幼年期、少年期における学の根底は朱子学だと思ふんです。科擧の試験を目指して、どこまでいけるかは別として、ともかくある程度は朱子を勉強しなければ仕方がない。すべてはそこからでしょう。幼年期の体験っていうのは大きいですよ。

近藤 清朝考証学における朱子学に対しては、例の協同研究のときの討論会のしめくりの前に前野（直彬）さんが非常に上手に全体をまとめた発表をしてくれた中にありましてね。今も印象的なんです。たとえば「格物致知」の「格」をどう読むかと、そこへまた山井さんも意見を加えてくれましたとね、あれをいったいどう読むのか。「いたる」か「ただす」かその読みかたに

よって、そこに清朝考証学の本質があることになるのかなのか、そういう非常に微妙な問題が。

加地 あるんですね。それから朱子学ですね、ステップを踏んでいけば物事がわかるんだという確信があるでしょう。これは精神的には清朝考証学もいっしょだと思ふんですよ。順番に追っていけば真相がわかるという考え。私は考証学と言つたって思考法の根底には、朱子学の「物にいたる」、順番にいけば聖賢の域に至ることができるといふ思考、それがやっぱりあるような気がするんですね。どなたも朱子学と考証学との分離こそ意識せよ、連関はおっしゃらない。

近藤 私は分離したつもりはありません。今更ですけど。むしろですね、そこそ語類の形でだとか、あるいは朱子学の亜流的なものは問題にしませんけど、朱子その人に対する敬意は終始失つてないと僕は思います。ただ、自分が聖人になれるんだ、なるんだ、などという考えは清朝の学者たちにはみじんもないんですね。あくまでも聖人の心への肉迫……。

加地 はい。それは先生が最もおっしゃりたいことですね。その次は、「文学」ということばの問題なんですけど、文学いうてもイメージはいろいろあると思うんですね。例えば、小説の類の文学の系統もあればですね、いわゆる古典詩といえますかね、教養人が必ず心得る詩という文学の問題、あるいはもっと広く、まさに吉川先生がおっしゃるのように、ことばで書かれてあるもの、という意味の文学という意味ですね。

近藤 あるいは今の西洋文学の意識における文学。

加地 はい、虚構としての文学ですか。そうすると文学という場合に一体、中国文学の研究者が、清朝考証学を、先生を含めて文学を言う場合、どの線をお考えですか。文学ということばがでてくる場合、いつもひっかかるんです。ヨーロッパ人は何もひっかからんのじゃないですか。我々はいつもひっかかる。

近藤 いや本当ですね。私なんかが一番勉強でわからないのはヨーロッパの文学の概念なんです。これはそれこそ八高時代に土居光知の『文学序説』（岩波）か何か読んだ程度。我々の高等学校時代におけるそういうイメージはあるけれども皆忘れちゃっておりましたね。むしろ今、挙げていただいた三つ目の吉川先生の文学、ことばとしての文学、つまり清朝考証学ってのはですね、あくまでことばと密着した文学だと。生きた人間のことはの研究であって、でそれが、段玉裁で考えたんですけども、人間の学だというと、それこそはなはだおこがましい。おこがましいというよりも、軽率に使えないことばですけれども、西洋哲学の表現から言うところわいことばですけれども、やっぱり人間研究の学なんだと、ことばとあくまでも密着している、と、そういう意味での文学と。

加地 道具としてのことばじゃなくて、人間の心を伝えることばであると。

近藤 言霊。いや言霊なんて言うともた・・・・。

加地 それ私重要だと思つてます。ヨーロッパ人の言うてるこ

とばというのは依然として道具的な意識があるんですよね。しかし、物として見ないで、人間が使っているものという、場所をもとにしてしているものと、私はアジアの言語はそういうものだと思つていふんですけれども、そういう人間に繋がっているという意味のことばということですね。ところで我々の普通のイメージはですね、清朝考証学と言いましたら、例えばですね、過去に皆がわからなかったことを、或いは間違つていたことを明らかにしてきたと、事実を白日の下にさらしてきただという、そういうイメージはやっぱりあるでしょう。考証学者の行つた仕事は、どうですか。

近藤 清朝考証学に対する従来の認識では要するに役に立つもんやと、その成果を利用すればどの研究にも便利なもんではあるという認識ですね。しかもそれはまだまだしな余程いい認識でしょうかね。

加地 今度の御本でそれが打ち破られたと思います。一般にはまさに考証オンリーというイメージでしょう。

近藤 それも役に立つというところまで認識しているかどうか。加地 そこまですらいかない。そこまできなくて、要するにいろいろ事実をあれこれ言っているんだという、何かそんなね。近藤 本の虫になるやつと学問だとかね。そういうことでしょうか。

加地 ええ、それを先生がこの本の中でそういうような見方はなくて、もっと生き生きした人間が営む営為といふますかね、

ことを通じて、とされたということに、私は非常にその、清朝考証学に対する面目を新たにされたと思ひまして、非常にもしろ良かった、いやおもしろかったなどと申しますと失礼ですね、すみません。どう申しあげたらいいのかな。

近藤 いや一番ありがたいことばだと思ひますね。これをおもしろいと思つて読んで下さる方は、それこそ清人清儒せいひんせいじゆの学問の水準にある方であると思ひます。

加地 とんでもない。それと文章が明晰で読みやすいですね。御書名、このタイトル見ましたら、何かとつつきにくいと思うでしょうけど、そうじゃないんですね。漢学臭がまったくなく、非常にわかりやすく、また、さきほど申しましたようなサーブス精神に富まれて説明を詳しくしてらっしゃる。原文がある場合は必ず書き下し文、或いは翻訳という形でされてますから近藤 一か所だけ例外があつて、たちまち加地先生に突かれました。

加地 いやいや。この非常に読みやすいということと、それから人名や書名が多い割にはあまり抵抗がない。本当ですよ。それは、上手にお書きになつてゐるからだと思ふんですけれども、非常におもしろかったですね。そしてずいぶん多くのことを学ばせていただきました。本当にありがとうございます。

近藤 ありがとうございます。

(完)

### 「補記」西暦年への換算について

加地 伸行

『集刊東洋学』六〇号（一九八八年）に、浜口富士雄氏の書評「近藤光男著『清朝考証学の研究』」があり、丁寧論評しているが、最後に次のように記している。

「戴震の生年を西暦で表記するならば、一七二三年でなくて一七二四年とすべきである。なぜなら、戴震の誕生日の「雍正元年十二月二十四日己巳」は「西暦一七二四年一月十九日」に当るからである。この誤りは「研究姿勢にもかかわる」と。

つまり、旧暦を西暦に換算すれば、一七二三年は、旧暦「雍正元年十二月五日」で終つており、一七二四年一月一日は旧暦「雍正元年十二月六日」に当るので、誕生日が旧暦「雍正元年十二月二十四日」ならば一七二四年の中にはいるというわけである。西暦との対応という点で言えば、なるほど事実はその通りであろう。しかし、基準を西暦に置き、西暦を絶対化するとき、思わぬやっかいなできごとが起るのである。たとえば陳垣の名著『二十史朔閏表』をひもとくと、西暦一年は、前漢の平帝の旧暦「元始元年」に相当する。ところが、その旧暦「元始元年一月一日」は、西暦「一年二月十一日」に当る。

そこで陳垣は、備考欄に、西暦「一年一月一日」は、その四十二日前、前年の旧暦「元寿二年十一月十九日戊寅」に当ると記している。すると、「元寿二年十一月十九日」から「元始元年二月十日」までの四十二日間は、いったい、西暦一年なので

あろうか、西暦前一年なのであろうか。浜口氏流に言えば、当然西暦一年ということになる。

四十二日間と言えば、約一ヶ月半である。ところが、一般的な年表では、元寿二年を西暦前一年、元始元年を西暦一年と記すのみであって、ほとんどこの四十二日間について触れない。

しかし、あえて四十二日間を西暦一年に算入するとしよう。すると、ことは元寿二年の問題だけにとどまらない。この四十二

日分は、当然、元寿二年の前年の元寿元年へ、さらに元寿元年の前年の建平四年へと、食いこむ。そしてこのあと、閏月が何度もはいつてくるから、私のように暦に弱い者はお手あげであり、そのあとがどうなってゆくのか、よく分らない。たとえ、評価の高い新城新蔵著『東洋天文学史研究』（弘文堂）の「春秋長歴」「戦国秦漢の暦注」を、むつかしいので頭をひねりながら何度も読んだが、正直言つて話がよく分らない。四十二日分の前年への食いこみということに気がするだけである。

しかし、西暦年などというのは、時を測る便宜上の尺度の一つにすぎないのであって、その正誤で研究全体の評価が変わると思わない。厳密な西暦表記ということで大児病的に換算してゆけば、いわゆる西暦前のことについての多くの論考が正誤の網にひっかかることであらう。しかし、それによって珠玉の諸論考の価値がさがるわけではない。

また、あえて言えば、西暦一年はキリスト誕生の年であるというので、西暦五二七年に、宣教師のロニス（若尼斯）とい

う者が西暦の採用を言いだしたとのことである。

ところが、考証的研究では、現行の西暦一年は、キリスト九歳の年であるという。なんのことはない、はじめからサバを読んでいたわけだ。「西暦紀元」の定義として、もし「西暦一年をキリスト誕生の年とする」ことを厳密に絶対化するならば、われわれが使っている西暦年数に対して、常に八年を加えるべきである。しかし現実にはだれもそんなことをしない。

今日使用の西暦は、一五八二年にグレゴリオ十三世が改暦（十月五日を十月十五日として）して作ったものである。そこで陳垣は同書「例言」で、一五八二年以前は、旧暦のほうが、かえって史実に対して正しいと判断している。グレゴリオ暦までの西洋暦に、いろいろと矛盾や問題があるからである。さすが陳垣は一代の歴史学者であり、見識がある。そして陳垣は、一五八二年以後はグレゴリオ西暦を基準にしようと言っている。

また陳垣の「例言」と表中の備考欄とによれば、グレゴリオ西暦を各国が使いだしたのは比較的新しく、次のようである。一五八二年、イタリー・イスパニア・フランス・オランダ。一五八四年、ゲルマン民族。一六九八年、デンマーク。一七三一年、スエーデン。一七五二年、イギリス。一八七三年から、日本（実行のため明治五年十二月三日を六年一月一日に充てた）。ロシア、一九一八年。なお、イスラム教徒は西暦など使わない。あくまでもイスラム暦（回曆）である。

計算の方法が違うので、旧暦「二月一日」と西暦「二月一日」

とが常に食いちがっているのは当然である。だから、旧暦の  
 いた十一月ごろあたりから、翌年二月ごろにかけておこつた  
 できごとを、西暦年に充てようとすると、たとえば『二十史朔  
 閏表』や『三正綜覽』を使って換算することが必要である。逆  
 に言えば、仮に西暦の充てかたを誤つたとしても、それを大発  
 見として鬼の首でも取つたかのように言うべきではあるまい。

自分がすべて換算したのではなくて、所詮、われわれはたとえ  
 ば『二十史朔閏表』や『三正綜覽』のお蔭で換算できるにすぎ  
 ないからである。浜口氏も「手近な工真書『中国歴史紀年表』」  
 （書評中に引用）などという安物を使わず、たとえばこの『二  
 十史朔閏表』を使うことを勧める。しかし、同書は、前漢の成  
 立から始まっており、前漢以前に関しては、他に依りどころを  
 援用するなどしなければならず、正確な換算はそうたやすくな  
 い。『三正綜覽』（日本内務省）は始皇帝の三三年（西暦前二  
 一四年）から始まっており、それ以前は、たとえば前引の『東  
 洋天文学史研究』の附録「凶表」（春秋・戦国期など）などに  
 依ることになる。それでもまだ定説ではない。それを推してあ  
 えて蔽密に換算を行なつたところで、どれだけ「研究姿勢にも  
 かかわる」（浜口氏引用のことば）というのであろうか。大げ  
 さすぎる。肝腎なことは、その著書の大河の流れを見ること  
 である。

前漢末の旧暦「元始元年」の場合、それを「西暦一年」に当  
 てたというだけで、両者の関係を表わして十分である。まして、

人間の年齢を示すとき、東北アジアでは、数え年という独特の  
 方法があり、かつてはよく使われた。これは、満年齢よりも、  
 ある意味では合理的なのである。たとえば、西暦一年の一月一  
 日生れの者も、同年の十二月三十一年生れのものも、実質一年  
 の差があるものの、その西暦一年に関しては同じく一歳（当歳）  
 とし、翌年一月一日に全員を二歳として、同一世代を表わすわ  
 けである。それを西欧流に、野暮に満何歳何個月何日と（分析  
 的）に記すのが正しいという理由はどこにもない。それは西欧  
 人流の表現にすぎないのであって普遍性はない。同一年内に生  
 れたものを同一クラスにまとめるという（拙著『中国論理学史研究』参照）、  
 中国人の考えかたであり（拙著『中国論理学史研究』参照）、  
 数え年というのは、その一つの現われであろう。

近藤氏とこういう話をしあつた。雍正元年を一七二三年と記  
 すのは、一七二三年に相当するといふ両者の関係を表わすにす  
 ぎない。戴震の場合、便宜上、生年の雍正元年を一七二三年に  
 充てたのであり、そうしておけば、数え年を考える場合、混乱  
 が起らない。それをたまたま生年月日まで分つていたことに依  
 り、一七二四年に修正すると、段玉裁の『戴先生年譜』に記し  
 ている毎年の「何年何歳」という数え年と合わなくなつてしまつ  
 て、研究に不便か、あるいは失敗を招くのがオチであろう、と。

さらにあえて言えば、一七二三年であらうと一七二四年であ  
 ろうと、戴震の伝記研究をするといふ特定の問題以外、その相  
 違はたいしたことではない。年月日の相違を問題とするのは、

そのことよつてたとえ或る特定文献の前後関係とか、西暦とか、そういったことにかかわるところの、決定的証拠の意味を持つようなときである。人物の存在時期をただ示すものならば、戴震の場合、「十八世紀中ごろの人」と記しても十分である。一七二三年を一七二四年としなければ「研究姿勢にもかかわる」と言うならば、「十八世紀中ごろの人」という粗大な表現をしたとき、その研究姿勢はどうなるのか。もし「清朝中期」などと記しては、その研究姿勢は論外ということになるのか。

いま私は、西暦年に換算する問題を一般論として述べている。なぜ一般論として論ずる気になつたか。それには理由がある。アジアの文化とは異なる西暦について取りあげるならば、われわれアジア人がよく知らない西暦月日の持つ問題点も同時に示すべきであつて、西暦をただ絶対化して疑いを抱かないという態度に対して、私は批判的であるからである。(誤解を避けるために念を押して言へば、浜口氏がそうだとするのではないが)たとえ西暦を絶対化する人の心情には、西欧文化をなんでも絶対視し崇拜するという、明治以来の知識人の抜きがたい劣等感や自我の未確立や自立心のなきを感じる。私は青年時代から、そういうお調子者を批判してきた。欧米文化に無条件に従うのではなくて、自分の頭で考える人間であつてこそ、はじめてそ

の研究姿勢が成り立つというものであらう。

なお、川原秀城氏(岐阜大学)の御教示によれば、陳垣の『二十史朔閏表』は、汪曰楨の『歴代長術輯要』十卷・『古今推歩諸術攷』二卷を巧みに盗用したものであるとのことである。アイデアは前者から、また計算に使用した定数の表は後者から得たようである。陳垣は、『二十史朔閏表』「例言」において、汪曰楨の『歴代長術輯要』を挙げ、その始まりを「周の共和に起す。然れども魯(国)の隠(公)以後、『春秋』と合わず。史実にあらざるなり」と批判しているが、川原氏の説によれば、陳垣は汪曰楨の業績をきちんと紹介すべきであらう。

また、漢初の朔閏表については、最近の発掘による考古学的成果として竹簡の曆書が得られており、それに基づく研究を、川原秀城氏に御指教いただいた。それは、陳久金・陳美東の共同執筆による論文「臨沂出土漢初古曆初探」(『中国天文学史論文集』所収・科学出版社・一九七八年)である。同論文は、顧頡膺・殷曆・『歴代長術輯要』の推定や、この三者の比較表や、漢の高祖元年(西暦前二〇六年)から武帝の元封六年(前一〇五年)までの朔閏表を新しく作っている。川原氏によれば、現在のところ、最も信頼すべき説であるとのことである。

『清朝考証学の研究』補正表

三三〇／8 凌<sup>レ</sup>廷<sup>レ</sup>堪<sup>ル</sup> 凌<sup>レ</sup>廷<sup>レ</sup>堪<sup>ル</sup>  
 一〇五／10 泪<sup>乎</sup>五<sup>季</sup>  
 一一四／3 而已<sup>x</sup>  
 一七九／4 乾隆<sup>十五年</sup>  
 一八五／18 乾隆<sup>十五年</sup>  
 一八七／15 との宣言<sup>を</sup>して<sup>いる</sup>こと<sup>に</sup>なる<sup>\*</sup>

凌<sup>レ</sup>廷<sup>レ</sup>堪<sup>ル</sup> 凌<sup>レ</sup>廷<sup>レ</sup>堪<sup>ル</sup>  
 洎<sup>乎</sup>五<sup>季</sup>  
 而已<sup>〇</sup>  
 乾隆<sup>十四年</sup>  
 乾隆<sup>十五年</sup>  
 との宣言<sup>を</sup>して<sup>いる</sup>こと<sup>に</sup>なる<sup>\*</sup>  
 (四六九ページ「あとがき」参照)  
 一七一至一七三  
 七十三歳  
 幽風<sup>x</sup>  
 という<sup>こと</sup>には<sup>\*</sup>  
 西溪  
 實証<sup>〇</sup>精神<sup>〇</sup>  
 鯁<sup>〇</sup>  
 千里<sup>を</sup>以<sup>て</sup>す<sup>\*</sup>

四二六／5 「學海堂<sup>x</sup>第十注」  
 四八八／下11 四十六歳  
 四六三／上20 降恩<sup>x</sup>  
 「學海堂<sup>〇</sup>第十注」  
 四十八歳  
 陸恩<sup>〇</sup>

(以下索引)

ix 「姚鼐」ニ337ヲ補入  
 xv 「四民月令236」ヲ「四書釋地」ノ下へ補入  
 xvii 「疇人搏(247)續補 247」トモニ算用数字ヲゴチニスル  
 xix 經籍<sup>〇</sup>詰序 經籍<sup>〇</sup>詰序  
 xiii 「空言 94」ニ「400」ヲ加エル  
 // 「不知而作 334 338」  
 「不<sup>レ</sup>漏<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>誤<sup>レ</sup>5」  
 ヲ「博く經史に通じ…」ノ下へ補入

対談(上)の正誤表

四三／下16 文選<sup>の</sup>任<sup>〇</sup>口<sup>x</sup> 文選<sup>の</sup>任<sup>〇</sup>防<sup>〇</sup>  
 四五／下2 漢字<sup>x</sup>と 漢字<sup>〇</sup>と  
 四五／下13 訓<sup>〇</sup>口<sup>x</sup>の<sup>〇</sup>字<sup>〇</sup> 訓<sup>〇</sup>口<sup>x</sup>の<sup>〇</sup>字<sup>〇</sup>